The Japan Society of Educational Sociology

国境を越えて移動する「非教育ママ」のライフスタイルと子育てをめぐる葛藤

—グアムに移住した日本人母親を事例に—

○大阪大学大学院　芝野 淳一

1．はじめに

近年、教育社会学やその周辺領域では、「親が子どもの教育に最終的な責任を負うことを前提に成り立っている」（神原 2004、p.199）〈教育する家族〉のイデオロギーが、日本社会において広がっていることが指摘されている。その際、特に問題化されてきたのが、〈教育する家族〉の主な担い手である母親—〈教育する母〉（神原 2004）の存在である。彼女たちは「子育てに強迫される母親たち」（本田 2008）として表象され、母親たちの子育て経験やそこに潜む格差や葛藤について多くの研究が蓄積されてきた。このような母親たちの抑圧状況は、〈教育する母〉の規範が母親のライフタイルを監視・抑圧することによって引き起こされていると言える。

他方、現代は移動の時代である。日本では、1960年代以降、日系企業の海外進出にともない増加した企業の駐在家庭が海外に移住する人々として注目を集めてきた。しかし、近年、駐在家庭のように移住せざるを得ないために移住するのではなく、「より良い生活」を求めて日本社会の「しがらみ」から脱出し、海外へ自発的に移住する「ライフスタイル移民」と呼ばれる人々が散見されている（長友 2013など）。

グローバル化のなかで、人々のライフスタイルの選択と国境を越える移動が結びつき、「移住の多様化」（長友 2013）が進んでいるという状況は、〈教育する母〉の規範が蔓延する日本社会から脱出し自分たちのライフスタイルを模索しながら子育てを行なう母親が存在しているかもしれないということに気付かせてくれる。

以上を踏まえ、本発表は、日本に蔓延する〈教育する母〉の規範に監視・抑圧された「非教育ママ」が自発的に海外に移住することによって新たな生き方と子育てを模索する事例分析を通して、日本における母親の子育て問題を逆照射することを目的とする。

ところで、「非教育ママ」とは誰なのか。本田（2004）は、「教育ママ」と「非教育ママ」の分断線を、子どもの学業達成に興味があるかないかの違いであると設定し、興味がない層（「非教育ママ」）に低学歴非専業主婦の母親が比較的多く分類されていることが明らかになっている。したがって、本発表では、「非教育ママ」を、子どもには注力を注いでいるが、「教育ママ」のように「『人格も学力も』という全方位型の教育関心」（額賀 2013、p. 55）をもたず、熱心に子どもの教育達成に関わろうとしない、あるいはそれに価値を見いだしていない相対的に学歴が低い非専業主婦層の母親としている。また、本発表の「非教育ママ」には、貧困家庭や子どもをネグレクトする母親は含まれていない。

2．調査概要

本稿で扱うデータは、2012年2月と2013年2月にグアムで行った母親に対する聞き取りとフィールド調査から得られたものである。グアムをフィールドとして選択した理由に、「ライフスタイル移民」の多くが観光地に移住していることが明らかにされていることが挙げられる。

聞き取りは、小学校から大学生までの子どもを持つ母親（20代後半から50代前半）22名を対象に行った。彼女たちは、起業（主に飲食業か観光業）、語学留学、日系企業への現地採用等でVISAを取得し、半数以上の母親が永住権を取得していた。なかには、シングルマザーで来島し、その後現地で国際結婚した者や現地に住む日本人と結婚した者もいる。彼女たちのほとんどが非大卒（19名）で就労者（19名）であり、また、日本にいるときも「働く母親」であった。さらに聞き取りの結果、彼女たちは子どもを中心とした生活や子どもの教育達成に価値を置いていない母親であった。これらより、彼女たちは学歴が相対的に低い非専業主婦の「非教育ママ」と言える。

フィールドワークでは、母親たちによって不

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

定期に開かれる飲み会やイベントへの参加、スクールバスの停留所での観察、日本人学校・補習校や私立学校への訪問・聞き取りによるデータを収集することができた。

3. 事例

3-1. 〈教育する母〉規範のしがらみとグアムへの移住

本項では、国内で「非教育ママ」であった経験が海外へ移住する動機と直接的／間接的に結びついていることが明らかにした。本稿の対象者たちは、「教育ママ」の多い地域において母親関係をめぐってなにがしかの「つらい」経験や「教育ママ」に対する疑問を有しており、なかにはそこから逃れるために海外移住を決意した母親もいた。こうして移住してきた母親は、ハードな仕事をこなしつつも、「非教育ママ」が多いグアム社会のなかで〈教育する母〉から解放され、移住した自分たちの「生き方」と重ね合わせながら子育てを行なっていた。

3-2. 「日本社会」への再埋め込みと子育てをめぐる葛藤

一方で、グアムに「脱出」してきた母親たちが、子どもの学校選択を通じて再び現地の日本人コミュニティに埋め込まれ、階層的背景の違う「教育ママ」たちと出会うことで、日本において内面化された排除のまなざしやそれをめぐる葛藤が再び彼女たちに経験されることを、ある母親の事例を中心に明らかにした。移住先においても、階層的背景による母親関係をめぐる分断は持ち込まれ、母親の子育てをめぐる葛藤は継続される。日本を脱出したからといって容易に〈教育する母〉規範から抜け出すことはできないのである。また「教育ママ」からの排除のまなざしの内面化と〈教育する母〉であらなければならないことに対する「恐怖の記憶」の蘇りは、母親に心的葛藤をもたらすだけではなく、移住先における「非教育ママ」の生活空間を管理する方向へと導かれていた。

3-3. 葛藤を緩和するコミュニティと日本人母親の「棲み分け」

続いて、母親たちが再び経験することになった〈教育する母〉規範の強迫から解放されるために、同じような境遇にある母親たちを孤独から解放させる、「わが子中心主義」(神原 2004)から脱するような小さな自助的コミュニティが形成されていることを明らかにした。そこで母親たちは、自分たちの子育てを肯定的に語り合ったり、日本とは違ったスタイルで子どもを育てようとしていた。しかし一方で、そうした排除のまなざしからの解放および理想的な子育ての追究が、階層的背景による母親の棲み分けプロセスと不可分であることを指摘した。

4. おわりに

本稿で得られた知見から、次の二点が示唆される。第一に、〈教育する母〉の規範は国境を越えても継続するということである。本稿で見た、母親たちが駐在家庭の母親との関係を通じて経験した排除のまなざしの「蘇り」や「恐怖」は、日本において母親たちを抑圧している〈教育する母〉の規範であり、国境を越えても作動する日本社会からの監視によるものであるということだ。しかし、ここで留意しておかなければならないのは、問題化すべき対象は決して駐在家庭の母親ではないということである。海外で生活する駐在家庭の母親もまた、日本社会が要請する〈教育する母〉の規範によって「子育てを強迫される母親たち」(本田 2008)なのである。したがって、問われるべきは、異国の地においても母親たちに執拗につきまとう〈教育する母〉の規範と、それがもたらす諸々の葛藤が母親たちのバックグラウンドによって質的に異なっているということである。この点において、本事例は、「海外移住者」の問題だけに留まらず、〈教育する母〉の規範がはびこる日本社会の「異様さ」を映し出す鏡として位置づけることができるだろう。

第二に、グローバル化が進展する中で、ライフスタイルを追求して海外へ移住し、移住先でコミュニティを形成し〈教育する母〉の規範に対抗する母親たちのオルタナティブな「生き方」は、一方的に抑圧される存在として表象される傾向が強かった母親像を再考する契機を与えてくれるということである。〈教育する母〉の規範への対抗を模索して生きる母親の姿を捉えていくことは、その問題を打開する可能性を示唆している。しかし、そうした母親の実践が、移住先で「日本人」の分断を招いていることも忘れてはならない。神原(2004)は日本における〈教育する家族〉の大衆化が、地域における子どもの仲間関係の分断と地域子育てネットワークの分断を招くことを危惧しているが(p. 200)、本事例からは、そのような分断が、「教育ママ」側の子どもの教育達成への探究心からではなく、「非教育ママ」側の理想的な子育ての追求によって引き起こされる可能性を示唆している。

〈先行研究の整理・事例のデータ・文献の詳細は、当日配布する資料を参照してください〉

NII-Electronic Library Service